論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	方　正
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日本語学習者の作文に対する評価
―日本人教師と中国人教師の比較―

論文審査担当者

主　　査　教　授　　松見　法男
審査委員　教　授　　間瀬　茂夫
審査委員　教　授　　柳澤　浩哉
審査委員　准教授　　渡部　倫子

〔論文審査の要旨〕

本論文は，中国人日本語学習者の書いた作文を対象とし，評価行動（作文を読み，評価尺度を用いて評定すること）と評価モデル（分析的評価尺度の構成概念と総合的評価尺度との関係）の観点から，日本人日本語教師（以下，JST）と中国人日本語教師（以下，CST）による作文評価の相違を検討したものである。

論文の構成は，次のとおりである。

第１章では，問題の所在と本研究の目的を述べた。

第２章では，日本語教育における属性の異なる評価者による評価，英語教育における評価者の作文評価行動，母語話者教師と非母語話者教師による作文評価の比較に関する先行研究をまとめ，それらの課題について論じた。先行研究の課題を踏まえ，本研究では，以下のように研究課題を設定した。

1）JST と CST による作文の評価行動にどのような違いがあるのか。

2）JST と CST による作文の評価モデルにどのような違いがあるのか。

第３章では，JST と CST が作文評価する際の評価行動の違いを明らかにすることを目的とした調査Ⅰの結果を示した。調査Ⅰでは，発話思考法を用いて JST10 名と CST10 名に４本の作文を評価させ，評価者の評価過程を「作文を読む」段階と「評定」段階の２つの段階に分け，質的に分析した。その結果，JST より CST のほうが，指示詞などのミクロ構成を含む言語形式の正確さを重視しており，JST は，理解可能であれば誤用を容認する傾向であることがわかった。また，作文の内容と作文全体に関わるマクロ構成については，CST より JST のほうが重視していた。その原因として，JST は母語話者としての日本語の知識や作文の構成に関する知識を，CST は学習者と同様の文化的背景と日本語学習経験をそれぞれ有していること，両者の母語のレトリックパターンが異なることが考えられる。

第４章では，JST と CST の評価行動に影響を与える潜在的な要因を解明し，両者の評価モデルを比較することを目的とした調査Ⅱの結果をまとめた。調査Ⅱの対象者は JST88 名，CST84 名であった。調査Ⅰのフォローアップインタビューで得られた評価者の意見に基づき評価尺度を修正し，総合的な評価尺度２項目（作文全体に対する印象，読み手を意

識しているかどうかに対する印象），分析的な評価尺度 21 項目で構成された質問紙調査を行った。評価の対象は，調査Ⅰで使用した 4 本の作文の中で，JST と CST による評定値の差の傾向を最も反映している作文Ⅱと作文Ⅲとした。因子分析の結果，JST は「説得力のある構成」「正確さ」「結束性」，CST は「構成」「正確さ」「内容」という各 3 つの因子が得られた。CST の 3 つの因子は，従来の日本語作文の評価尺度と類似していたが，JST は異なっており，3 つの因子すべてに「構成」にかかわる項目が含まれていた。

また，因子得点を用いた重回帰分析の結果では，JST と CST が作文評価をする際，総合的な評価尺度の評定を予測する要因が異なっていた。作文全体に対する印象については，JST は「説得力のある構成」と「正確さ」が，CST は「内容」と「正確さ」が影響を与えており，読み手を意識しているかどうかに対する印象については，JST は「説得力のある構成」が，CST は「内容」と「正確さ」が影響を与えていることが示唆された。作文を評価する際に，最も重視するものに関して，JST と CST の意識に差は見られなかったが，内容の評価が難しいと答えた JST が CST よりも多かった。作文評価の厳しさも両者は異なっており，JST は「結束性（指示詞・接続詞などのミクロ構成）」を寛容に評定するが，CST は「正確さ」を厳しく評定することがわかった。記述統計量から，この評価の厳しさの違いには作文指導経験が影響していることが予想されるが，その影響は CST による「内容」の評価にしか見られなかった。

第 5 章では，調査Ⅰと調査Ⅱの結果について総合的に考察し，日本語教育における作文教育への示唆を述べた。さらに，本研究の限界を踏まえたうえで，今後の課題をまとめた。

本論文は，次の 3 点で高く評価できる。

1. 非母語話者教師による日本語の作文評価の実態を質的・量的アプローチによって多角的に検討した。これまでの日本語の作文評価研究において，日本語教師，一般日本人，または日本語学習者による評価の実態が報告されているが，非母語話者教師の評価を扱ったものは見当たらない。

2. 日本語母語話者教師と非母語話者教師の評価行動の相違を明らかにした。両者の相違点を解明したことにより，今後の作文評価研究，大規模テストにおける評価者トレーニング，実際の教育現場における教師の評価活動にとって，有益な情報を提供できた。

3. 日本語母語話者教師と非母語話者教師の評価モデルを仮説として提示した。日本語教育分野において，教師の作文評価モデルを取り上げる研究が少ないうえ，これまでは，評価尺度に対する重視度だけが分析の対象となっていた。今後，本研究で提示した作文評価モデルを検証することにより，日本語だけでなく様々な言語による作文の評価研究の発展に寄与できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成３１年　２月　５日